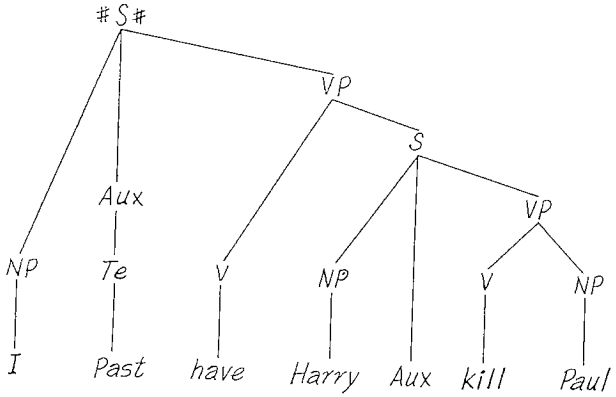
目的語構文と WITH 変形

石　黒　昭　博

Chomsky によって主唱され，現在各分野で研究の進められている変形文法理論は，二つの型の変形規則を活用する[1]．即ち，単純変形（simple transformation）と総合変形（generalized transformation）である．前者はひとつの文を他の文へ変換する操作を記述するものであり，後者は第三の文を生成する（generate）するために二つの文を結びつける操作を記述するものである[2]．以下の小論は，総合変形の考え方をもとにして，英語の使役構文，have 構文，目的語構文の生成を分析した試みである．

変形文法では，英語の使役構文は主動詞に対して文補語（sentence complement）をもった構文として分析される．例えば，

I had Harry kill Paul.

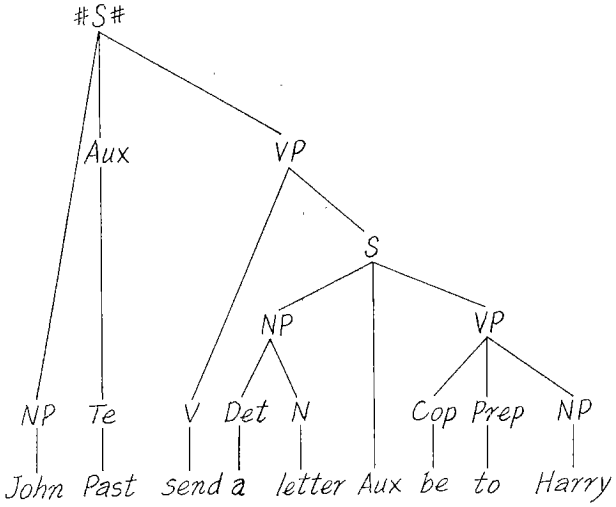


は，上の様な「下敷き構造 (underlying structure)」をもつものと考えられる．

同様に，間接目的語構文のあるものも主動詞に対して文補語をもった構文に分析することができる．例えば，

John sent a letter to Harry.

は次の「下敷き構造」をもっていると考えられる．



上の文は，独立的に誘導された任意変形と，他の小変形を，先にあげた文に加えることにより

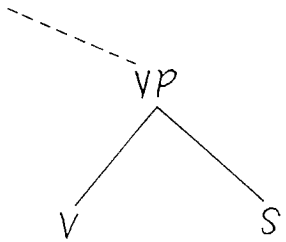
John sent Harry a letter.

に簡単に変えうる[3]．かくして

John sent a letter to Harry. と

John sent Harry a letter.

は，同一の「下敷き構造」をもつゆえに，同義文 (synonymous sentences) である[4]．もしこれまでに述べた，間接目的語構文，使役構文の分析が本質的に正しいという仮定にたてば，この事実によって，間接目的語構文と使役構文の構造の間には，いちぢるしい類似性が見られることになる．つまり，この二構文はともに



という同一の構造をもつものである．

間接目的語構文と使役構文の間に密接な関係があるという証拠は，間接目的語構文を作る動詞がいつも使役の意味を内包していることからも明らかである．したがって，

I gave John a letter. は，
I made John have a letter. に，
The paint gave the table a dull look. は，
The paint made the table look dull.

にそれぞれ言いかえする (paraphrase) することができる．

上の事実からも，

I gave John a letter.

という文中で，*John* と *a letter* はある種の文法的単位を形成しているものと考えられる．

これは，

I gave John money.

という文を考えたとき，

I gave John. は

I gave John money.

とは何の関係もないが，*John* と *money* の間には，

John received money.

という事実がかくされていることや，

I made Harry mad.

という文で，

I made Harry. は

I made Harry mad.

と何の関係もないが，Harry と mad の間には，

Harry is mad.

という事実がかくされていることからも明らかである．これは Jespersen が言うように，間接目的語——直接目的語，目的語——目的補語が別の文を文中で形成しているからであると説明できよう[5]．これを裏がえして言ったら，上例の文はそれぞれ二つの別の文が変形を経て第三の文を作ったのだということになる．

間接目的語動詞の選択制限条件（selectional restrictions）を述べるに際して，いろいろ困難な点があるということは，「下敷き構造」にひとすじなわでいかない複雑なものがあることを想定させる．

Poutsma によると，間接目的語は「人的目的語（person-object)」で，

直接目的語は「物的目的語 (thing-object)」であるということになっているが[6]，これは必ずしも事実ではない．例えば，

They credited fifty dollars to my account. は，

They credited my account fifty dollars.

と言いかえができるし，この間接目的語 *my account* は「人的目的語」ではない．

もし直接目的語が，その主要部 (head) に *appearance* のような名詞をもっていたら，間接目的語は何でもよい．これは，

His gestures gave his argument an appearance of redundancy.

や，

The light gave the rock an insubstantial appearance.

のような例文から明らかである．

間接目的語と直接目的語の間にみられる関係は，次にあげる *have* を主動詞とした文でさらに明白に考察しうる．

My account has fifty dollars.

His argument has an appearance of redundancy.

The rock has an insubstantial appearance.

つまり，上の例文のような *have* を主動詞にもった文の主語，目的語になり得るものは，それぞれ別の動詞を主動詞にした間接目的語構文の中で，間接，直接目的語になり得るのである．

また，当然のことながら，変則的な間接目的語構文からは，文法的に正しい「*have* を主動詞とした文」(以後「have 構文」と呼ぶ．) は作れない．例えば，

*I gave John to a letter.[7]

は非文法的であるから，これから得られる

*A letter has John.

も非文法的である．

次に，上に述べた間接目的語構文と *have* 構文の関係を分析したいと思う．そのためには，まず，*have* 構文の構造を分析することが先決問題であろう．

いままであげた *have* 構文の例文はいずれも

〔NP Auxiliary Copula Preposition NP〕$_S$

という構造をもった文に書き変えできる．例えば，

My account has fifty dollars. は
Fifty dollars is in my account.

または，

There is fifty dollars in my account.

に書き変えできるし，

His argument has an appenrance of redundancy. は
There is an appearance of redundancy in his argument. に
The rock has an insubstantial appearance. は
There is an insubstantial appearance to the rock.

にそれぞれ書き変え得る.[8]

剰余的な (redundant) 目的語は任意につけたり，はずしたりしてよい．つまり，

My account has fifty dollars (in it.)

The rock has an insubstantial appearance (to it.)

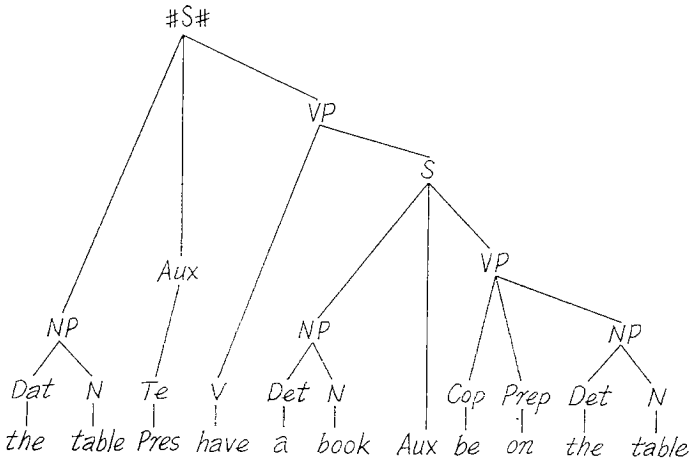
では，カッコで囲んだ部分が任意部分である．

繋辞文 (Copula sentence) は have 構文に抱合された (embedded) 形で現れ，剰余的な NP は代名詞化され，それから任意的に消去される．これ以外の方法をもってしては，剰余的目的語を含んだ句が現われることを説明することは不可能ではなかろうか．

これら *have* 構文と繋辞文の同義性を説明するためには，これらが同じ下敷き構造をもっていることを明らかにしなければならない．表面的な形の違いは，この同一の下敷き構造に変形が施されたか否かによるものである．したがって，いま問題になっている繋辞文はこの変形が施されたものであり，*have* 構文は変形が施されなかったものであると説明できれば上の条件は充たされる．このことを簡単に調べてみよう．

The table has a book on it.

なる文は次の構造樹図 (tree) をもつものとする．



しかし，もしこの分析によって，

The table has a book on it.

と

A book is on the table.

が同一の下敷き構造をもつものならば，後の文は主文（matrix sentence）の消去によって生じたものであると説明しなければならないし，また，抱合文の中の NP のあるものは，必ず *have* の主語と同一でなければならぬという条件も必ず加えておかねばならない．これは，

＊The table has a book on the desk.

というような実際にはあり得ないが，生じ得る可能性の少しでも残るものを排除するために必要なのである．さらに，すべての繋辞文はこのようにして生じるものであるということにしておいて，分析上のあいまいさを除いておく必要もある．恐らくもっと妥当な句構造要素（P-marker）を見つけ出すことができたら上の＊のついた例文のような文の生成（generation）を避けることができるのかもしれないが，いまの段階では，筆者には適当なものが思い当らない．かくて，この第一の方法は不適当であることが証明された．つまり，*have* 構文は仮設的変形(hypothetical transformation)が施された場合に生じるという仮説は却下されるわけである．

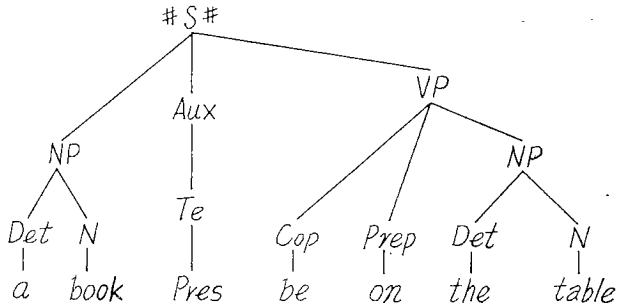
したがって，第二の方法を考え出さなければならない．つまり *have* 構文独自の句構造要素を見つけ出すことが必要である．*have* 構文は，*have* 構文自体とその言い変えの繋辞文の双方の下敷きになっているひとつの句構造要素に変形を施して生成されるものだ，という仮定に立ってみよう．この場合，あとで明らかになるように，*have* 構文を複合文として考える必要は全くなくなる[9]．

have 構文を導き出す変形の第一策は次の様なものである．

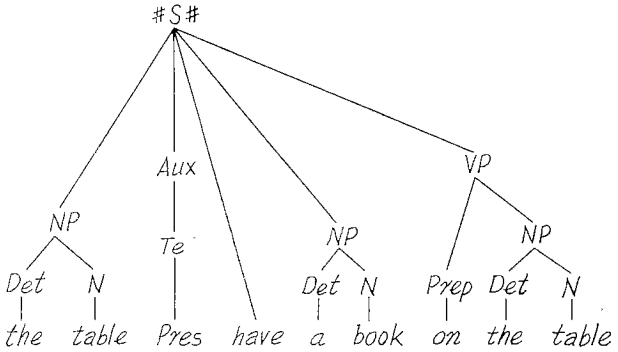
$$\underset{1}{\text{NP}},\ \underset{2}{\text{Aux}},\ \underset{3}{\text{Cop}},\ \underset{4}{\text{Prep}},\ \underset{5}{\text{NP}}\Big]_{S} \rightarrow 5\quad 2\quad \text{have}\quad 1\quad 4\quad 5.$$

これを

A book is on the table.



に適用してみると



The table has a book on it.

を得る.[10]

さて，この変形の考え方を応用して，もっと実際的な変形を考えてみることにする．いままであげた *have* 構文の例文にみられる主動詞 *have* はすべて *be with* がその下敷き構造であるという仮説である． これは意味論にもそんなに無理なものではないし，関係節省略規則[11]を大幅に簡素化す

るものである.

The man that is in the room is my father. から

The man in the room is my father.

が得られるのは,

that Aux be → ϕ

という規則を適用したものである. しかし,

The table that has a cover is the one I want.

の簡約形は,

The table with a cover is the one I want.

である. このことからも *have* と *be with* には密接な関係があることがわかる. もし, *have* が本来 *be with* ならば, 余分な規則は不要である. つまり, さきにあげた変形規則を

$$\underset{1}{[\mathrm{NP},}\ \underset{2}{\mathrm{Aux}}\ \underset{3}{\mathrm{Cop},}\ \underset{4}{\mathrm{Prep},}\ \mathrm{NP}]_S \rightarrow 4\quad 2\quad \mathrm{with}\quad 1\quad 3\quad 4$$

というように改訂すればよい. 一応, この変形規則を WITH 変形規則と名づけることにする.[12]

この規則も完璧とはいえないが, 間接目的語の生成の過程をある程度説明するには役立つ. またこの規則を適用し, さらに文中の *with* を消去することによって, いくつもの文の生成上の説明ができよう. 次にあげるAからEまでの各グループの文のおのおのは, それぞれ主動詞が文補語をもった文である. a) の項であげる文は,

$$[\mathrm{NP}\quad \mathrm{Cop}\quad \mathrm{Prep}\quad \mathrm{NP}]_S$$

という構造をもった補語をもっている．したがって WITH 変形規則の構造記述（structural description）を満足させるものである．以下あげられる a), b）は同義（synonymous）である．派生（derivation）の上での相異点は， b）の各文は WITH 変形が施されたものであり， a）の各文は WITH 変形が施されていないものにすぎない． 下敷き構造は同一である．したがって真の意味での同義性が存在するのである．[13]

最初のグループAの例文では，前置詞を伴った剰余的目的語が生じた場合これは消去し得る．

A.

a） I like that hat on you.

b） I like you with that hat on.

a） I want icecream on my pie.

b） I want my pie with icecream (on it.)[14]

不定詞の *to* が残存している場合には，be with は have に変える必要がない．

I want my pie to be with icecream on it.

次のグループ B の例文では， 剰余的目的語は WITH 変形規則が適用された後で必ず消去されなければならない．

B.

a） He planted apples in the orchard.

b） He planted the orchard with apples.

a） He stocked fish in the stream.

b） He stocked the stream with fish.

a) He heaped ridicule on John.
b) He heaped John with ridicule.

a) He hung curtains in the kitchen.
b) He hung the kitchen with curtains.

a) He spread butter on the bread.
b) He spread the bread with butter.

a) He inspired confidence in me.
b) He inspired me with confidence.

a) They conferred honors on him.
b) They conferred him with honors.

次のグループCの例文では，狭義の主語，つまり動作の起こし手は明らかでない．このような場合には，前置詞句の中の *head* 名詞が主語の位置に立つ．

C.

a) Fish teem in the sea.
b) The sea teems with fish.

a) Bees swarm in the garden.
b) The garden swarms with bees.

a) Cobwebs hung in the kitchen.
b) The kitchen hung with cobwebs.

次のグループDの例文では，前置詞句を構成する前置詞が to の場合には，WITH 変形規則によってつけ加えられた *with* は任意的に消去され

得る.

D.

a) He assigned a task to John.

b) He assigned John with a task.

c) He asssigned John a task.

a) He supplied money to them.

b) He supplied them with money.

c) He supplied them money.

a) He left a fortune to his nephew.

b) He left his nephew with a fortune.

c) He left his nephew a fortune.

a) He furnishes books to libraries.[15]

b) He furnishes libraries with books.

c) He furnishes libraries books.

a) He provided cash to me.

b) He provided me with cash.

c) He provided me cash.

a) He presented a ring to me.[16]

b) He presented me with a ring.

c) He presented me a ring.

次のグループEの例文では, *with* は必ず消去されねばならない.

E.

a) I sent a letter to John.

b) I sent John a letter.

a) I gave a present to John.

b) I gave John a present.

つまり,

*I sent John with a letter.

*I gave John with a present.

はともに正しい文ではない．この事実から，Eの文の動詞は間接目的語をとることはとっても，Bの *plant* やDの *assign* とは別の分類に属し，はっきり区別しなければならないことになる．*send* や *give* のような純間接目的動詞のあとでは，一旦 WITH 変形で生じた *with* は必ず消去されねばならない．

AからEまでの例文に現れた動詞と使役動詞 *have, make* の類似性を次に調べてみよう．使役動詞 *have, make* がこれらの他の動詞と異なる点は

〔NP Cop Prep NP〕

以外の形をした文補語をとり得ることであろう．例えば,

a) I made a roof on the house.

b) I made the house with a roof on it.

a) I had a roof on the house by Friday.

b) I had the house with a roof on it by Friday.

の各組では，文補語の形が

〔NP Cop Prep NP〕

であるが,

I made the roof green.

I had roof green by Friday.

では，文補語は別の形をしている[17]．したがって，これら二種の *make, have* を用いた文をさきの規則で生成することはできない．

この分析のもうひとつの無理に思える点は，間接目的構文の下敷き構造として考えられる抱合文の中には，非文法的に見えるものがあることである．例えば，

I gave the book to John.

は

the book Aux be to John

を抱合文としてもっているものとしたら，

＊The book is to John.

というような文が独立して存在することを是認しなければならない．しかし，これは当然無理である．これは次の様に説明すれば解決できる．即ち，

＊The book is to John.

は存在しないが

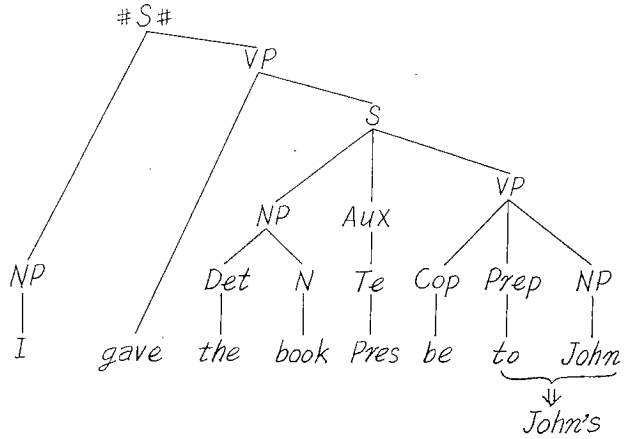
the book Pres be to John.

は文法的な形として存在し，これは上記の string の状態から

The book is John's.

という形に強制変形（obligatory transformation）されるものであると考

えるのである．この場合，目的格から所有格への変更を変形規則の中に含めるのである．この所有格は前置詞 to から得られるもので，*to* は下敷き構造の中に存在するものである．図示すると次の様になる．



さきに WITH 変形を施したのち生ずる剰余的目的語とそれに先行する前置詞は消去し得ると述べたが，これによると，

The table has a book.

は

The table has a book on it.

から得られたものであると考えられるが，同時に

$$\text{The table has a book} \left\{ \begin{array}{l} \text{under} \\ \text{in} \\ \text{above} \end{array} \right\} \text{it.}$$

から得られたものとも考えられる．そうなると，

The table has a book.

は何重にもあいまいな (ambiguous) 文であると言えそうに思える．しかし，これはそうではない．それは，*the table* と *a book* の空間的関係は単に不定 (indefinite) な関係であるに過ぎず，不定関係を表す前置詞が *to* であるし，

* The table has a book to it.

が不可能な文であることからも *to* はこの場合生じ得ないからである．かくして，「*to*＋代名詞」なる句は消去されるが，「他の前置詞＋目的語」はそのまま残されるのである．ゆえに

The table has a book.

は

the table Pres be with a book to the table.

からのみ得られるのである．

さて，次に「*of*＋代名詞」を消去する規則のことを考えてみよう．

The table has a book in the drawer.

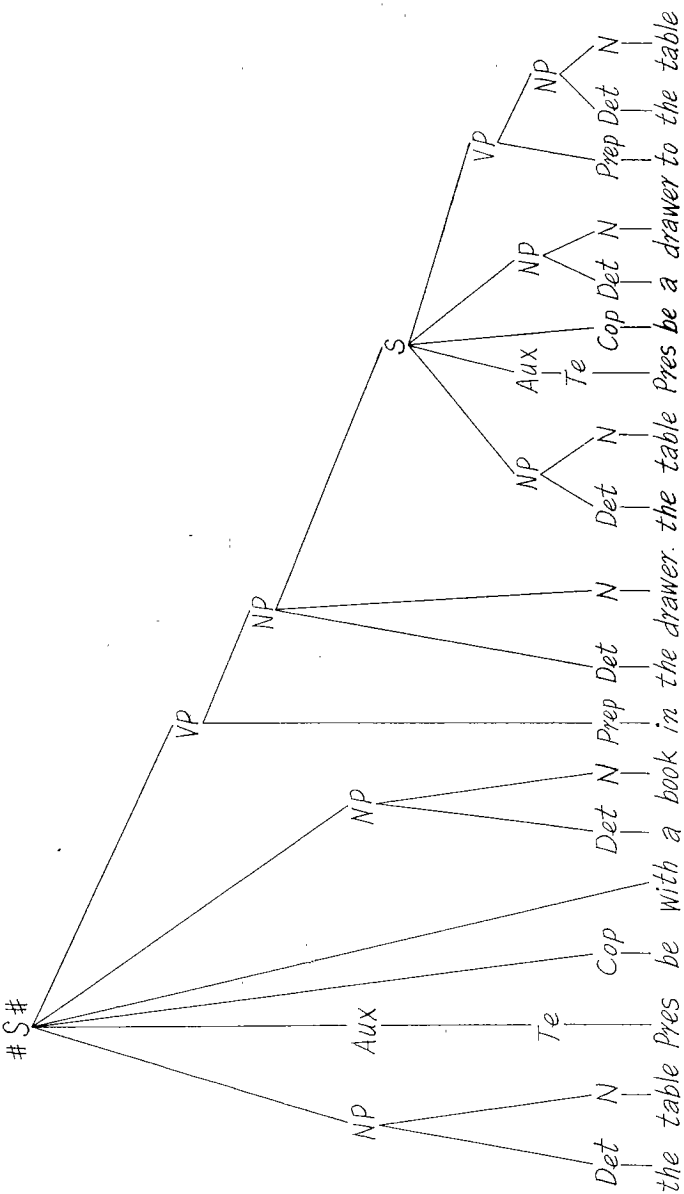
なる文では，*the drawer* は *the table* の *drawer* であることが了解されていなければならない[18]．これは，この文が

The table has a book in its drawer.

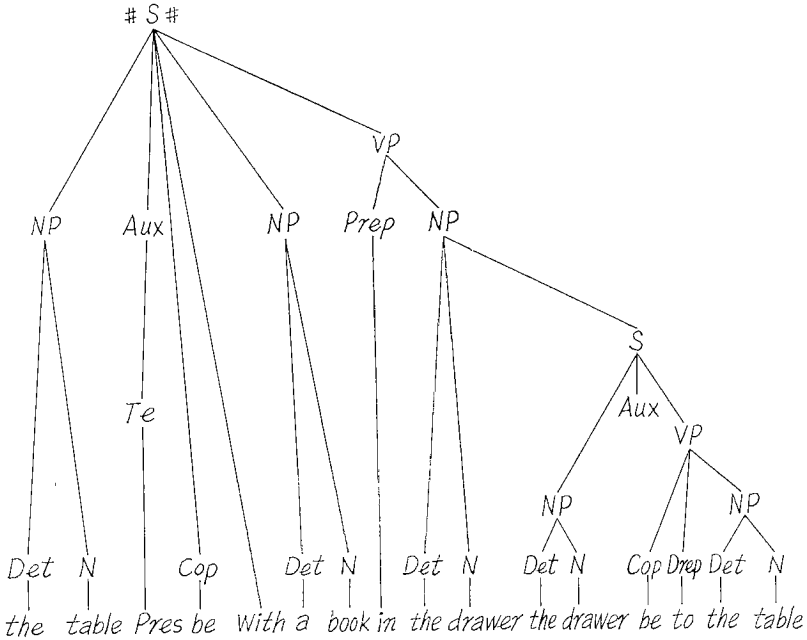
という文の省略形だと考えれば説明がつく．所有格はもともと「*have* を主動詞とした関係節」から生成されたものだという有力な説が是認されていることからもこれは妥当な意見である[19]．

この場合に，さきに述べた *have* 構文の分析方法を応用すると

The table has a book in its drawer. は


#S#
NP
Det
N
the table
Aux
Pres
Te
Cop
be
NP
Det
N
with a book
VP
Prep
in
NP
Det
N
the drawer.
S
NP
Det
N
the table
Aux
Pres
Te
Cop
be
NP
Det
N
a drawer
VP
Prep
to
NP
Det
N
the table

のような構造樹図をもつが，もし WITH 変形規則が抱合文に適用されなければ，この樹図は，



となり，これから所有格を導き出すのには，かなりむつかしい操作がいる．だから，所有格は「*have* を主動詞とした関係節」を下敷きにして考えた方が得易い．つまり，ここでは *to* を *of* に変えさえすればよい．[20] *to* が *of* に変えられる前に「*to*＋代名詞」は消去され，文は

The table has a book in the drower.

という形で現れ，もはや「*of*＋代名詞」を消去する規則は不要となる．

これをさらによく説明するのは，次の例にみられる *to* の残存である．

$$\text{He is}\left\{\begin{array}{l}\text{father}\\ \text{secretary}\\ \text{servant}\\ \text{a friend}\\ \text{the physician}\end{array}\right\}\text{to the President.}$$ [21]

この *to* は人間関係を表す名詞の後で用いられているが，この to を外の前置詞におきかえることはできない．

最後に，WITH 変形を別の角度から検討してみることにする．WITH 変形は

$$[\text{NP Aux Cop Prep NP}]_{S}$$

という構造をもった文以外の文にも適用される．勿論，間接目的語動詞はこの構造の文補語しか抱合できないのは，さきに述べた通りである．実際，いままであげた have 構文の例文のうち WITH 変形を経て生成されたものが多いのは注目すべき事実である．

次の例文のうち，b）は a）に WITH 変形を加えて生成されたものである．

a) A book is in the drawer of the table.

b) The drawer of the table has a book in it.

b′) The table has a book in $\left\{\begin{array}{l}\text{its}\\ \text{the}\end{array}\right\}$ drawer.

a) The leg of the table is broken.

b) The table has its leg broken.

a) An unreal appearance was given to the house by the moon.

b) The house had an unreal appearance given to it by the moon.

a) A picture which was painted by Smith was hanging in the gallery.

b) Smith had a picture which was painted by him hanging in the gallery.

a) A coin was in a pocket of mine.

b) A pocket of mine had a coin in it.

b′) I had a coin in a pocket of mine.

こうして考えてみると，WITH 変形はすべての「前置詞句をもった繫辞文」に適用できるのではないかという可能性が考えられる．

次の例の場合も参考になる．[22]

a) The house was painted by John last Friday.

b) John had the house painted last Friday.

の二文は同義である．しかるに，

*John had the house painted by Harry by last Friday.

は非文法的である．このことから，

The house was painted.

はあいまいである．なぜなら，これは

Someone painted the house.

に受動変形を施したものと考えられるし，また

$[\text{NP Aux Cop Adjective-Phrase}]_{S}$

なる句構造構成分子（phrase structure component）から直接得ることも

できるからであり，後者の場合には，

The house was red.

と類似の構造をもつものと考えた結果である．そしてこの場合は *by last Friday* は時を表す副詞句を表すもので，agent を表すものではない．

*John had the house painted by Harry by last Friday.

が非文法的なのは，agent を表す句 *by Harry* がこの *have* 構文の中で他の要素と共存できないからである．この考え方によらなければ

The house was painted by John by last Friday.

は得ることができない．なぜなら，

*John painted the house by last Friday.

は非文法的であるから，これから受動変形によって

The house was painted by John by last Friday.

を得ることはできないからである．こういう受身文の変形を WITH 変形の中に加え得るかどうかは，今後の研究課題である．

この小論は *have* 構文のあるものや，間接目的語構文を WITH 変形というものを仮定して生成する過程を述べたものである．間接目的語を含んだ文の生成については，多くの議論が闘わされているが，いまだ完成途上にある生成文法 (generative grammar) の理論の常として，いまだ結論は出ていない．しかし，繫辞と前置詞句の結びつきから，他の文要素を導き出す方法は大きな可能性を秘めた方法であるように思われる．それは繫辞と前置詞は共に独立した意味をもった品詞であり，その両者の結びつきに

よって表わされた意味は他の動詞の表わし得る意味にもっとも接近し得る可能性を内包しているからである．つまり，「*be*＋前置詞句」からなる文を下敷き構造として重ねて並べることによって，ある動詞が他の文要素と相まって文の中でかもし出す独特の意味の世界を別の方法で再現することが可能になるからである．現代英語のように語順が定着し，その語順によって意味を述べる言語の分析は，この方法によってもたらされる成果が大いに注目されているのも当然である．

注

1. Chomsky の文法理論の詳細と，その正当性に関しては，Chomsky, N., "The Logical Basis of Linguistic Theory," *Proceedings of the Ninth International Congress of Linguistics* (The Hague: Mouton, 1963) や Chomsky, N., *Aspects of the Theory of Syntax* (Cambridge: M. I. T. Press, 1965) にくわしい．
2. Generalized transformation に関しては，Lees, R. B., *The Grammar of English Nominalization* (*IJAL* 26.3 Part II, 1960) など参照．
3. この変形は，筆者の恩師 Charles J. Fillmore が創唱したもの．くわしくは，Fillmore, C. J., "Indirect object construction in Englsh and the ordering of transformations", (The Ohio State University Research Foundation, *Project on Linguistic Analysis, Report No.* 1, 1962) 参照．これは Mouton から単行本として reprint 版がでている．
4. *cf.* Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax*, p. 23.
5. *cf.* Jespersen, O., *A Modern English Grammar* (London: George Allen & Unwin Ltd, 1958), Vol III, p. 279.
6. Poutsma, H., *A Grammar of Late Modern English* (Groningen: P. Noordhoff, 1928), Part I., Chap III, Section 4 & 38.
7. ＊印のついた文は ungrammatical ないし non-standard なものを表わす．
8. There ... 構文は，There を付加的につけ加える変形を経て，得られたものである．
9. この場合 have 構文は使役の have 構文を一応除外して考える．
10. この tree は不要な部分を消去したものを示す．以下現れるすべての tree に関しても同じ．
11. *cf.* Lees, *op. cit.* pp. 90–94.

12. この考え方はオハイオ州立大学言語学科の助手 Gregory Lee 君が提唱したものである.

Jespersen は *Philosophy of Grammar* (Londar: George Allen & Unwin Ltd, 1963), pp. 161–163 でこの同じ事実に注目し, 方法は違うが, 興味深い洞察を展開している.

13. 次にあげられる例文を含めて, この小論中の例文はほとんどオハイオ州立大学言語学科の同僚 Sandra Annear, Gregory Lee, James Heringer の諸君, Charles J. Fillmore 博士, D. Terence Langendoen 博士らがクラスや討論の際にあげられたものである.

14. b) は関係節を用いた形には言い変えできない.

＊I want my pie that has icecream on it.

15. *cf.* Jespersen, *Philosophy of Grammar*, p. 162.

16. *Ibid.*

17. 文補語の形は〔NP Aux Cop Adj-Phrase〕

18. この分析は D. T. Langendoen 博士の講義 (1965) で明らかにされた.

19. This is *my* hat. は This is the hat *that I have* から得られる.

20. its＝of it.

21. Poutsma, *op. cit.* Part II, Chap. 24, Section 36 & 37.

22. この場合, いわゆる受身文を繫辞文の一種として考えたもの.